

令和5年12月7日

日立理科クラブ通信



No. 214

日立理科クラブ

「理科室のおじさん」を訪ねて2 日立市立成沢小学校

今回は、成沢小学校(熊谷智仁校長)の古山文治さんです。古山さんは、今の新潟県新潟市の出身です。小学4年生の頃から、田畑の仕事を手伝っていました。今でも、稲1本から米120粒とれば、1反の田んぼから米8俵取れるとわかるそうです。どうすれば収穫が多くなるかを、小中学校の頃から考え、実践してきたからだと思います。そして、高校生の頃には、世の中に出てモノづくりをするためには、技術とお金について知ることが必要である考え、国鉄(JR)やお店で丁稚奉公のような体験をさせてもらったそうです。今言うインターンシップの先取りですね。

古山さんと話していると、子どもの頃から、自立し、よく勉強しているのを感じます。夜更かしは効率がよくないことから10時までには寝るようにして、朝5時に起きて勉強するなど生活習慣も大事にしてきたそうですが、それをお孫さんもまねしているとのことでした。

理科クラブに入る前は、日立製作所の機械設計部で圧延機的设计に従事しました。また、佐和工場でカーエアコンの設計や収支管理などもやったそうです。機械の設計から管理の仕事と幅広いことに驚きます。どんな仕事にも挑戦してきたことがよくわかります。そして、退職した今でも日立の技術研修所で講師を頼まれ、社員に講義を行っているそうです。

理科室のおじさんとしては、塙山小、成沢小を歴任しています。理科室に入ったときに、古山さんは授業で児童が使った試験管を洗っていました。本来は授業時間内に洗うところまでやるべきですが、授業時間が短く、休み時間もあまりないことから理科室のおじさんにやっていただくことが多いのが現実で、学校にとってはとても助かっているとよく聞きます。

先生とメモのやりとり等を通じてよくコミュニケーションをとって、授業の準備をしています。子どもたちがよくわかり、楽しそうに学習しているのを見るとやりがいを感じると話していました。

子どもたちから質問があると、休みの日を利用して図書館で徹底的に調べてそれを先生に渡すそうです。この日もノートを見せてくれましたが、よく整理しながら疑問に答えられるように調べていると思いました。

子どもたちに伝えたいこととして、「先生は子どもたちがどうしたらわかるようになるかととても勉強して授業に臨んでいるので真剣な態度で授業を受けて欲しい」と言っていました。ご自身でも研修所で講師をしているので、先生の気持ちがよくわかるようです。帰宅後に、授業を振り返り、先生が話したことのうち80%程度書けないと真剣な授業態度とはいえないと話していました。

理科室には、紙ばねチョロQがありました。紙だけで走るの子どもたちは不思議そうに楽しんでくれるそうです。また心臓の模型がありました。心臓はポンプの役目をしていると言いますが、実際にポンプで作ってみるとその役割がよくわかります。理科室のベランダにはヘチマが実を付けていました。観察後はタワシで利用するそうです。

最後に、成沢小学校のよさを聞きました。児童はとても元気で活気があること、そして手伝いを頼むと快く協力してくれると話していました。

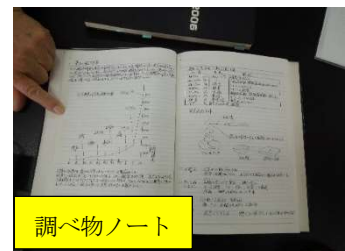
子どもたちとのやりとりが目に浮かぶようでした。



「理科室のおじさん」古山文治さん



理科室 窓の外にはヘチマ



調べ物ノート



紙ばねチョロQ



心臓の模型